

ギリシャ——メディアが信じ込ませる最大のウソ

【訳者注】私がこれを訳したこの時点で、ギリシャの国民投票による緊縮財政案（本論によれば実は搾取・略奪案）への NO（61.31%）が決定している。ギリシャ人は賢明だったというべきであろう。ここに書かれているようなことを知る人は、ごくわずかであろう。それほど巧妙に、銀行による詐欺と略奪が行われているということである。ぜひ「金融ブラックホールを保護し養育する？」を併せ読みたい。ブラックホールという言葉こそ使われていないが、この論文も同じ主旨であり、無慈悲で貪欲な金融ブラックホールの具体的な手口を分析している。イラク、イラン、リビア、シリアなどの武器や空爆が、ギリシャ、スペイン、ポルトガル、イタリアなどでは、銀行（と国際企業）に当たると考えてよいであろう。

By Global Research News (By Truth and Satire, July 3, 2015)

July 6, 2015



あらゆる主流メディアが、ギリシャの経済危機について次のような物語をして聞かせる——政府がカネを使いすぎたので破産したのだ——気前のいい銀行が彼らにカネを与えたのに、ギリシャがいまだにツケを払えないでいるのは、与えられたカネの使い方を間違えたからだ——。これはいかにも、もっともらしく聞こえる。そうではないか？

ただこれは、肥満した大きなウソである——ギリシャについてだけでなく、スペイン、ポルトガル、イタリア、アイルランドのような、さまざまな程度の緊縮経済を経験しつつある他のヨーロッパ諸国についても。それはまた、多くのラテンアメリカ、アジア、アフリカ諸国を搾取するために、過去何年にもわたり、銀行と企業が用いてきた肥満した大きなウソであった。

ギリシャは自己責任で破綻したのではない。ギリシャは破綻させられたのである。

簡単に言えば、銀行がギリシャ政府を崩壊させ、その後、それを故意に、支えきれない負債

へと追いやり、一方、歳入を生み出す公的資産は、寡頭政治家と国際企業に売却されたのである。この論文の残りは、どうやって、なぜ、そういうことになったかの説明である。

もしあなたがマフィア映画のファンなら、マフィアが人気のあるレストランをどうやって奪うかを知っているだろう。まず彼らは、商売を中断させるようなことを企む——例えば、そのレストランで殺人事件とか、火事を起こさせるといった具合に。商売に支障が出始めると、ゴッドファーザーは、友情の印として気前よく何がしかの金銭を提供する。その返礼に“グリーンジー・サム”に会計を担当させ、“ビッグ・ジョーイ”に仕入れをやらせる、といった具合だ。言うまでもなく、これは店のオーナーにとって滅びへのスパイラルであり、やがて彼は破産し、運がよければ生き延びる。

そこで、このマフィアのお話を、4つの段階で国際金融に当てはめてみよう。

ステージ1：ギリシャが困難に陥った最初の、第一の理由は、ウォール街と国際銀行家の考え出したものである2008年の“大金融危機”であった。覚えておられるだろうが、銀行たちは、生きてさえいれば誰にでも、サブプライムの抵当を用意してやろうという恐ろしい考えを思いついた。彼らは続いて、これらチクタク鳴っている金融爆弾を一まとめにして、世界中の国々のいろんな金融商社に、これを“抵当のついた有価証券”として売りつけ、巨大な利益を得た。

この犯罪行為を可能にした大きな存在は、銀行組織のもう一つ別の部門である格付け機関グループ——S&P、Fitch および Moody's——で、彼らはこれら失効する運命の金融商品に星の格付けを与えた。 <http://www.rollingstone.com/politics/news/the-last-mystery-of-the-financial-crisis-20130619> トニー・ブレアのような良心をもたぬ政治家たちが、ゴールドマン・サックスに加わり、これらの危険な有価証券を、ヨーロッパ中の年金ファンドや、市当局や国家に売りさばいた。銀行やウォール街のつわものどもは、このやり方で何千億ドルというカネを稼いだ。

しかしこれは、彼らの膨大なインチキの第一段階にすぎなかった。次の3段階で稼ぐべきもっとも巨大な利益があった！

ステージ2は、この金融時限爆弾が爆発したときだった。世界中の商業および投資銀行は、ものの数週間もしないうちに倒れ始めた。地方および地域レベルの政府は、彼らの投資と資産が目前で蒸発していくのを見た。あらゆるところに混乱が起った！

ゴールドマン・サックスや他の大銀行のようなハゲタカは、3つの方法で巨大な利益を得た

——（１）彼らは、リーマン・ブラザーズやワシントン・ミューチュアルのような他の銀行を、きわめて安価なドルで買うことができた。（２）更に大きな犯罪として、ゴールドマン・サックスや、ジョン・ポールソンのようなインサイダーは（ポールソンは最近ハーバード大学に４億ドルの寄付をした）、これらの有価証券がはじけるだろうと予言していた。

[http://www.rollingstone.com/politics/news/the-last-mystery-of-the-financial-crisis-](http://www.rollingstone.com/politics/news/the-last-mystery-of-the-financial-crisis-20130619)

[20130619](http://www.rollingstone.com/politics/news/the-last-mystery-of-the-financial-crisis-20130619) ポールソンは数十億を儲け、メディアは彼の先見の明を称えた。これを例えるなら、テロリストが９・１１に賭けをし、それによって儲けるようなものだ。（３）傷に塩を擦り込むように、大銀行は、銀行によって生活を破綻させられた市民自身から、公的資金による救済を要求した。銀行はどこまでも厚かましい。アメリカでは、彼らは納税者から数千ドル、銀行家の先頭グループにすぎない連邦準備銀行から数兆ドルを得ている。

ギリシャでは、国内銀行が、ギリシャ国民から 300 万億ドル以上の、公的資金による救済を受けた。しばらくこれを頭に染み込ませていただきたい——無責任ということになっているギリシャ政府が、資本主義そのものの銀行を救援しなければならなかったのである。

ステージ 3 は、銀行が政府に対し、巨額の負債を引き受けるように強要するときである。生物の比喩として、ウィルスかバクテリアを考えてみよう。それらはすべて、宿主の免疫システムを弱らせる独特の戦略をもっている。寄生的な国際的銀行家たちの用いる、証明されているテクニックの一つは、一つの国家の国債を格下げすることである。そしてこれこそが、2009 年末から始まって、銀行たちがやったことである。これは直ちに国債の利率（利回り）を引き上げさせ、国が新たにカネを借り、存在する債券を転がしていくことさえ、ますます困難になる。

2009 年から 2010 年中頃まで、10 年物のギリシャ国債の利回りは、ほとんど 3 倍に増えた！ <http://www.rollingstone.com/politics/news/the-last-mystery-of-the-financial-crisis-20130619> この残酷な金融攻撃は、ギリシャ政府を屈服させ、悪徳銀行家たちは、驚くなかれ 1,100 億ユーロという、彼らの最初の負債取引を勝ち取った。

銀行はまた、国家の政策をコントロールする。2011 年、ギリシャの首相が 2 度目の巨額な救済を拒んだとき、銀行は彼を力づくで失脚させ、直ちに ECB（欧州中央銀行）の副総裁を後釜に据えた！ <http://www.bbc.com/news/world-europe-15671354> 選挙は必要でなかった。民主主義など糞くらえ！そしてこの新しい男はどうしたか？彼は、悪徳銀行家どもが持ってくる書類のすべての印の付いた箇所、サインしたのであった。

（ついでに言うておくと、そのまさに翌日、全く同じことがイタリアでも起こり、首相が辞任し、銀行家/エコノミストの傀儡が後に坐った。

<http://www.nytimes.com/2011/11/14/world/europe/mario-monti-asked-to-form-a-new-government-in-italy.html> その10日後、スペインでは時期尚早の選挙が行われ、“テクノクラート”銀行家の傀儡が勝利した。）

この傀儡首脳たちにとって、2011年11月はかつてない最上の月だった。

数か月後、2012年には、まさにこの国債相場操作の手が用いられ、悪徳銀行家たちはギリシャ国債の利回りを50%に引き上げた!!! この金融テロリズムは望み通りの結果を伴った——ギリシャ議会は、最初のよりもっと大きい、2度目の膨大な救済に合意した。

ところでここに、ほとんどの人が理解していない、もう一つの事実がある。このローンは、あなたがクレジット・カードや銀行の経験から理解しているような、単純なローンではない。これらのローンは、一国の資産の私有化を要求する、非常に特殊な紐をくっつけてやってくる。もしあなたが『ゴッドファーザーⅢ』を見ていれば、仲間の間でキューバを切り分けようとしている、ハイマン・ロスを覚えているだろう。このハイマン・ロスを、ゴールドマン・サックスやIMF、またECBに置き換えてみれば、想像できるだろう。

ステージ4：いよいよ一国家の略奪と辱めが始まる。彼らに強制された負債のために、ギリシャは、その利益のあがる多くの資産を、寡頭政治家や国際企業に売らなければならなかった。しかも私有化は無慈悲で、利益になるあらゆるものを何でもさらっていく。ギリシャでは、私有化は、水、電気、郵便局、航空サービス、国立銀行、テレコミュニケーション、港湾管理所（これは船舶輸送の世界的リーダーである国では大きい）などを含んでいる。

<http://www.wsj.com/articles/SB10001424052702304520804576341414080784514>

それに加え、銀行家暴君たちはまた、政府予算のあらゆる一つひとつの項目を指図するようになる。軍事支出をカットしたいって？ だめだ！ 寡頭政治家や大企業の税を増税したいって？ だめだ！ このようなマイクロ経営の話は、他のどんな債権者 - 負債者関係においても出てこない。

では、銀行家による私有化と専制主義が始まるとどうなるのか？ もちろん政府の歳入は減り、負債は更に増大する。それをどうやって“始末”するか？ もちろん支出をカットすることだ！ 公共労働者を一時解雇し、最低賃金を下げ、年金をカットし（社会保障も同じ）、公共事業をカットし、99%の人口に影響を与える物品の税は上げるが、1%についてはそのままにする。例えば、年金は半分に下げられたが、消費税は20%以上に引き上げられた。こうしたすべての措置が、ギリシャでは財政的災害の進行中に取られたが、これは1930年代のアメリカの大不況時代よりひどいものだ。

もちろん、絶えず操作しようとする銀行家は、すべてのメディアの即刻の私有化を要求する。これは、この国にかっこいいテレビ・キャスターが現れて、連日プロパガンダを撒き散らすことを意味する。彼は国民に対して、あの根性の曲がった、貪欲な悪徳銀行家たちが救世主であり、緊縮財政の下の奴隷制の方が、その代替案より遥かにましだと言って聞かせる。

もしすべてのギリシャ人が、緊縮財政について真理を知っていたら、彼らはそれに騙されることはなかったであろう。同じことが、スペイン、イタリア、ポルトガル、アイルランドなど、緊縮財政を経験しつつある国々に当てはまる。このことの悲しい一面は、こうしたことが特別変わった戦略ではないということである。第二次大戦後、こうした略奪的な慣習が、ラテンアメリカ、アジア、アフリカで、IMFや世界銀行によって無数回、用いられてきた。

これが **New World Order**、すなわち一握りの企業と銀行に所有された世界の真髄である。

そこで今こそ、ギリシャのすぐれた人々がゼウスのように立ち上がり、貪欲な人形遣い、愛国心をもたぬ寡頭政治家、寄生的な銀行家、腐敗した政治家たちに向かって、**NO**（ギリシャ語で **OXI**）を言うべきときである。

愛するギリシャよ、世界があなたのために祈っていると知ってほしい。緊縮政策には **NO** を投票せよ。自由、独立、自己統治、そして民主主義に **YES** と言おう。そうだ、この民主主義という言葉は**あなた**によって発明された言葉だ！

P.S. 読者は、John Perkins——*Confessions of an Economic Hit Man* の著者——が、負債 - 緊縮政策 - 私有化という同じ手口を使って行われた、ラテンアメリカ、アジア諸国の搾取の様子を語る、次のビデオをご覧になることができる。

<https://youtu.be/RVsB07CcSNw>